

2021 年 1 月 31 日（日）「変わるものと変わらないもの」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:13-14

13 神の業を見よ。神が曲げたものを誰がまっすぐにできよう。

14 幸せな日には幸せであれ。不幸な日にはこう考えよ。人が後に起こることを見極められないように、神は両者を造られたのだ、と。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:13-14

13 神のみわざに目を留めよ。神が曲げたものをだれがまっすぐにできるだろうか。

14 順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。これもあれも、神のなさること。後のことを人に分からせないためである。

【序論】

2020 年に入ってから一年あまり、新型コロナウイルスの影響下で世界は身動きが取れない状態が続いています。人々の行動は制限され、医療現場は逼迫し、諸国が感染防止と経済活動の両立という困難な課題に直面しています。私たちの教会も、メンバーの半数以上がオンラインで礼拝を守ることにより、どうにか密を避けている状態です。例年行なってきた集合写真を撮ることはもはやできなくなり、従来のやり方では対外的な活動が困難になっています。礼拝出席者の数が分からないため、今後は礼拝出席者数推移グラフを書くということ自体がなくなるかもしれません。価値観が激変しようとしているのです。私はこの状況を見ながら、神学生時代に読んだ一冊の本が思い起こされていました。それは、宣教学のクラスで課題図書となった『宣教のパラダイム転換』（D. ボッシュ）という本です。この本では、キリスト教史を動かした価値観の転換点が、ハンス・キュンクによる 6 つの区分を軸にまとめられています。（第一巻 p.308）

①初代教会の黙示文学的パラダイム

②教父時代のヘレニズム的なパラダイム

③中世のローマ・カトリック教会パラダイム

④宗教改革時代のプロテスタント宗教改革パラダイム

⑤近代の啓蒙主義パラダイム

⑥現在出現しつつあるエキュメニカルなパラダイム

新型コロナウイルスの出現から顕著になりつつある「オンライン宣教」が第七のパラダイムを形成することになるかはまだ分かりませんが、私たちが宣教における一つの激変の時代を生きていることは間違いないでしょう。神様がこの世界に何をなさろうとしているのかを見守るばかりであります。

【本論】

本論 1. 物事を自由に曲げる方

神の業を見よ。神が曲げたものを誰がまっすぐにできよう。(7:13)

7章では多くの格言が並べられていますが、13節で語られている内容は1:15のそれと似ています。

曲がったものはまっすぐにならず、失われたものは数えられない。(1:15a)

1:15では、人間社会に存在する歪んだ事柄、欠けた情報、失われたデータなどを修正していくことに難儀を覚えるコヘレトの苦悩が語られていました。7:13ではより高い次元の事柄が語られており、神の御業の中で生じる物事の歪みについて考えさせられます。神は真実で正しいお方であると学んできている私たちにとって、その方が物事を曲げると言われるところに、理解の困難を覚えるのではないのでしょうか。神が曲げるものとは何を指すのか。最初の黙想のなかで、私は「人の心」「人生の進む道」「歴史の向かう方向」などの選択肢を挙げて考えていました。学んでみて分かってきたことは、ここでは神が決定された事柄は何者も変更することができないということです。そこには実に幅広い適用があります。歴史上に起きてくる、世界を揺るがすような事件があります。このたびの感染症の蔓延もまた、発生源が何であれ、大きな視点では神の御手の中にあるとすることができるでしょう。人間は移り変わる現実にもがきながら対応していかななくてはならない。また、私たちの日常生活に生じてくる試練も、それらは私たちの意思を超えたところから降りかかってくると思いますが、それに目を瞑ることはできません。歴史も個人の人生も、一面においては切り拓いていくものでありながら、他面においては対応の連続です。

13節の中身を学びながら、タルグムの解釈が目にとまりました。ユダヤ教のラビが「神が曲げられたもの」を「肉体的な歪み」に照らして説明しているのは興味深い。私も40代となり、体のあちこちが歪んできています。片方の肩が下がれば、それとのバランスを取るために別の部位が歪んできます。無意識で「歪み」に対応して生きているため、自分で治すことは困難なのです。人間は様々な「歪み」に対して対応しながら生きている存在であり、物質的な事柄だけでなく、心の歪み、真実の歪みに対しても同様であります。心のある部分が弱ければ、それと釣り合いを取ろうとする無意識の行動が出てくる。嘘をつく、それを隠すためにまた別の嘘をつく。タルグムがこの説明で目指しているところは、神だけが歪んだものを真っ直ぐにできるという結論です。罪人が物事を曲げるのを神はご支配の中でジッと観察し、御心の時に正されるのです。

本論 2. 良い日と悪い日の捉え方

幸せな日には幸せであれ。不幸な日にはこう考えよ。(7:14a)

「**幸せな日**」「**不幸な日**」を直訳すると「良い日」「悪い日」となります(新改訳では「順境の日」「逆境の日」)。コヘレトは、「**幸いな日**」にはそれに抗^{あらが}わず、その時を満喫するように読者に勧めます。「こんなに良いことばかり続くと、次は同じくらい悪いことが起きるのではないか」などと考える人もいるかもしれませんが、そのようなネガティブな思考に支配されることなく、「幸い」を蓄えるよう教えられているのです。ドイツの神学者ボンヘッファーも「力の源は、感謝に満ちた思い出である」という言葉を残しています。人生における良い思い出は、試練の日々を乗り越えていく原動力になるということでしょう。

「**不幸な日にはこう考えよ**」の「考えよ」の部分は、13 節の「**神の業を見よ**」の「見よ」(**הֲרֵאָה**)と同じ言葉です。自分にとってつらい日が訪れたときこそ、人は神の御業に目を向ける必要があるのです。このこともまた神の支配の中で起きていると。

人が後に起こることを見極められないように、神は両者を造られたのだ、と。(7:14b)

「**両者**」とは「**幸いな日**」「**不幸な日**」を指しますが、原文では「これも」「これも」という指示詞が二回使われています(新改訳では「これもあれも」)。良い日も悪い日も神の御手の中にある。

私たちには物事の「点」しか見るができなくても、神様の中ではすべてが「線」でつながっています。そして、その「線」が刺繍の糸のように一枚の布を縫っていき、ついには芸術的な美しい絵が出来上がります。私たちにはその全貌を見ることが未だ許されていませんが、やがて見る日がくるでしょう。今は多くのことの意味が分からない状態にありますが、必ず神の御心が明らかにされる時が訪れるのです。

神は意図して「**人が後に起こることを見極められないように**」しておられるようです。それは、神こそが歴史の支配者であり、私たちの人生の主であられるからです。人間には未来に起きてくることが知らされておらず、過去から学び、現在を懸命に生きることだけがよしとされています。コヘレトが勧めているのは、神の導きに逆らうことなく、身を委ねて生きる道です。あるがままに人生を受け留め、神に従って生きていくことが知恵とされている。

あなたがたは明日のことも、自分の命がどうなるかも知らないのです。あなたがたは、つかの間現れ、やがては消えてゆく霧にすぎません。むしろ、あなたがたは、「主の御心であれば、生きて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。(ヤコブ 4:14-15)

本論 3. あるがままに

今日の箇所は捉え方を間違えると、運命論的・宿命論的に「どうせ物事はすべて決められてしまっているんだから、何をしても無駄さ」という虚無的な世界観に陥るものとなるかもしれません。しかし、聖書の思想はそれとは真逆と言えるでしょう。それは、神が根本的に「善い」お方であるという約束に基づいています。神は人間の目に「悪」と映ることさえも、すべてご自身の「善」に向けて用いていかれる。

神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者のためには、万事が共に働いて益となるということを、私たちは知っています。（ローマ 8:28）

この神観に立つとき、私たちは「委ねる」生き方へと導かれていくでしょう。現実には逆らおうと躍起になるのではなく、肩の力を抜いて今を生きていきたいのです。コロナ後がどのような時代になっているのか、私たちには分かりません。コロナ前の状態を取り戻そうとする動きも出てくるでしょう。しかし、考え方を大きく変えていかななくてはならない部分もきっとあるに違いありません。それでいて、決して失われないものもあります。

はじめにご紹介しました『宣教のパラダイム転換』という本の中で、科学におけるパラダイム転換と神学におけるパラダイム転換の違いが説明されている部分があります。

パラダイム転換という考え方は、神学一般の研究において、そして本書との関連でいえば宣教の研究と理解において特に適切なものである。しかし、（トーマス・）クーンの考え方を神学の分野に無批判に適用してかまわないということではない。先ず第一に、この点に関して神学と自然科学との間に重要な差異がある。たとえば自然科学においては、新しいパラダイムは決定的に撤回しがたいほどに、古いパラダイムと置き換えられるのが普通である。ニュートン革命の後には、宇宙をコペルニクスの様な枠組みや、ましてプトレマイオスの様な枠組みで理解することは、もはや不可能になってしまった。神学においては（またこの点は芸術においても同じだが）、「古い」パラダイムはなおも生き続けることができる。時には、ほとんど忘れられていたような以前のパラダイムのリバイバルさえある。これはとりわけ、パウロのローマの信徒への手紙の「再発見」に明らかにすることができる――すなわち 4 世紀におけるアウグスティヌス、16 世紀のマルティン・ルター、さらに 20 世紀のカール・バルトによる再発見である。（第一巻 p.186）

ここでは、世界が著しく移り変わるなかにあって、何度も取り戻されていく福音の真理のことが言われています。

【結論】

私たちの生きているこの時代にも特殊性があり、これまでのどの時代とも違う変化が生じてきていると言えるでしょう。人と人との距離感、働き方、健康の常識、礼拝の仕方……。教会としても様々な変化に対応していかなくてはなりません。しかし、それでもやはり変わらないもの、常に立ち返るべき場所があります。それは、如何なる時代にも変わらず生き続ける福音の真理です。神の救いの方法、神の愛は決して変わることがありません。変わらないものがあるからこそ、私たちは信じて委ねることができるのではないのでしょうか。

【祈り】

永遠に変わらない神よ。私たちは移りゆく世に住んでおります。この短い一生の間にも著しい価値観の変動があり、時代に着いて行くのがやっとの私たちです。しかし、どんなにテクノロジーが進歩しようとも、変わらないものがあります。それは、神のことば、福音の真理です。私たちはこの「変わらないもの」を握りしめ、真珠のように大切にしながら歩んでまいります。それと同時に、今の世を生き抜く知恵をお与えください。教会として、変えてよいものとそうでないものを明確に見極めることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
移りゆく世にあって、変わらぬ巖であり給う、父なる神の愛、
人が選ぶべき「道」「真理」「いのち」として、常にそこにまし給う、主イエス・キリストの恵み、
時代に即した宣教の方法を教え、尚且つ福音のことばを原石のごとく保たせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。